

人間科学における 関係弁証法の展開 (4)

佐藤啓子・小原伸子

The Development of Relationships-Trialectics in Human Science 4

Hiroko Satoh and Nobuko Obara

This is the fourth report about the theme of "The Development of Relationships-Trialectics in Human Science."

In the first report (1979) and the second (1980), we have already made clear the basic principle of Relationships-Trialectics.

In the third (1981), we have also expounded home education taking the focus on infant's human formation through the point of view of Relationships-Trialectics.

In this paper, we inquire further into the theme of human development through the point of view of Relationships-Trialectics.

The contents of this paper are as follows:

Chap. I. Several problems about human development.

(1) About human development and human existence.

To summarize the human development research until now and consider it through the viewpoint of Relationships-Trialectics.

(2) About human development and the value.

To consider how to take in the value in the research situations of human development.

(3) About human development and education.

To consider the relation between human development and education.

Chap. II. The viewpoint of human development based on Relationships-Trialectics.

(1) About the movement of human development on research based Relationships-Trialectics.

To make clear the view of human development based on Relationships-Trialectics clarifying the past processes of human development research based on Relationships-Trialectics.

(2) About the future subjects of human development research based on Relationships-Trialectics.

Chap. III. The various aspects of human development based on Relationships-Trialectics.

(1) To point out the various aspects of infant's development based on Relations-Trialectics.

はじめに

本研究は、「人間科学における関係弁証法の展開」と題しての継続研究の第4報である。第1および第2報においては、主として、関係弁証法の基本理念を、第3報では、乳幼児期の家庭教育に視点を定め、論述を進めてきた。本報告では、人間発達に視点を定め、関係弁証法的に考察を進めようとするものである。

I. 人間発達をめぐる諸問題

1. 人間発達と人間存在について

これまでの継続研究過程（「人間科学における関係弁証法の展開(1)~(3)」、『人間科学研究』，文教大学人間科学部紀要，'79~'81）において明らかにしてきたとおり、筆者らは、「自己」・「人」・「物」の接在共存を基盤的事実とする関係弁証法の立場に立っている。

はじめに、人間発達研究についての従来の研究を概観すると、それは、次のように類別できる。

(1). 成熟説：人間の発達は、成熟により規定されるという見方。個の内的発展としての成熟が強調されるこの発達観では、自己・人・物の関係的存在としての人間の「自己」が強調されている発達観といえる。

(2). 環境説：人間は社会的存在であるという前提に立ち、人間の発達は、個人をとりまく周囲の環境：環境構成条件、教育的働きかけなどによって、発達の様相が異なるという見方。この説は、自己・人・物の関係的存在としての人間の「人」と「物」の関係が強調されている発達観といえる。

(3). 相互作用説：人間の成長・発達していく事実においては、生物学的、生理学的条件が基盤となりながらも、周囲の環境からの働きかけによっても影響されるという個人と環境との相互作用性が力説されている発達観で

ある。この説では、自己・人・物の関係的存在としての人間の、自己・人・物のそれぞれが、人間発達を促す構成単位としては認められつつも、「自己」と「人・物」を対峙させ、その2者的関係において発達が問題とされ、2者の「間性」が相互作用というプロセスとして認められていることに留まり、間性を具現化することの発展性（発達）は見逃がされている。

(4). 能動説：人間は、個の内的成熟に規定されたり、環境からの働きかけに規定されるという受身の存在のみならず、自己をとりまく環境へ、主体的・能動的に働きかけながら、環境をも変革しつつ、自らをも変化させ発達していくという主体としての人間存在が力説されている発達観である。この説では、自己・人・物の関係的存在としての人間の「自己」と「人・物」間の相互作用を超えて、相互作用を媒介とする自己・人・物の再構造化が求められている。このことは、人間発達を促す構成単位としての自己・人・物間の力動性が、自己・人・物自体に環元され、具現されていることが強調されている発達観といえる。その意味で、この説もまた、「自己」と「人・物」間の2者関係性が基盤となっている発達観であるといえよう。

(5). 関係発達説：人間は、自己・人・物の関係的存在であるとの見方に立ち、自己・人・物間の関係の仕方によって、関係の発達（自己の発達、人の発達、物の発達、およびそれら相互のかかわりあいの発達）の様相が異なるという発達観である。この発達観では、自己と人との関係が物の具現化への関与、自己と物の関係が人との関係発展への関与、人と物の関係が自己の形成への関与などのように、関係構成単位2単位間の関係が、第3の関係構成単位の生成、形成、具現はもとより、関係構成単位：自己・人・物の3者間の関係

構造の転換過程、および具現化が求められている。この発達観を促す契機としての自己・人・物の3者間の関係性が基盤となっている発達観であるといえる。

本稿では、(5)の関係発達説の立場に基づいて考察が進められている。

2. 人間発達と価値の問題

人間発達を課題とする考察において、主要な問題となるのは、「価値の問題」である。

人間が人間を対象とする研究である限り、事実が判明しさえすればよいということにはならない。当然、人間の尊厳が保持され、人間の世界が発展する方向性が前提とされることにおいて、研究は進められる必要があるし、進められねばならない。この人間の世界において、何を基準として発展とみなすか、ここに価値の問題が登場する。また、このことは、研究者が研究状況を、内側から担うか、外側から担うか、内と外とを間的に担うかとも関連してこよう。

人間発達研究においてみられる価値のとり入れ方を類別すれば、以下のとおりである。

(1). 価値の排除

人間発達研究状況から、出来る限り、価値を排除して、発達の事実を明らかにしていくことを優先する立場。これは、研究状況を、研究者が外側から担う在り方に対応しよう。この進め方からは、人間発達研究の科学的方法論、データや統計処理による裏づけ、客観性等の吟味に重点が置かれることになろう。

(2). 絶対的価値性

人間発達研究状況に、固定的な、質的・内容的価値性を提示し、その方向性に照らして人間の発達がどのように進行し、接近していくかを明確化する立場。これは、研究者が研究状況を内側から（あるいは内在的に）担う在り方に対応しよう。ここでは、国家的理念、イデオロギー、宗教観、ある種の教育観などの理念的追求と相まって、人間発達研究が為されていくことになろう。

(3). 相対的価値性

この立場では、①. 個別的価値性、②. 状況的価値性とを類別できる。そのどちらにおいても、質的・内容的価値は、個人により、状況により、相対的に変化し得るとの立場をとっている。

①. 個別的価値性では、人間発達における諸様相の標準性、一般性が明らかにされはしても、その標準や一般の枠には該当しない部分をも併せ有するのが人間の個別的存在であり、個別的・独自のであるが故に、人間世界の発展の契機となり得る可能性として、ひとりひとりの人間の個有性に意義を見出し、そこに価値を置きながら研究を進める立場である。

②. 状況的価値性では、人間発達研究において、価値を認めはしても、それは、状況と共に変動し、創り出される価値であり、枠組的な価値である。枠組的な価値とは、自己・人・物の関係枠に支えられる接在共存状況の成立を意味し、従って、その内容や質は、関係状況によって変化する価値である。この立場では、人間をとりまく関係状況の追求や、そこでの接在共存の担われ方の追求に重点が置かれて発達研究が進められることになろう。従って、この立場では、研究者が研究状況を、内と外とを間的に（内と外との境界領域を）担う在り方に対応する。

本研究での立場は、この状況的価値性に基づいている。これは、接在共存状況の創造に価値を置く立場である。

3. 人間発達と教育の問題

次に、人間発達と教育の関係について考察する。

「教育とは何か」についての定義も、立場も様々であるが、どの立場においても共通に述べられていることは、人が人に対する働きかけを含んでいることである。狭義では、働きかけをする人を教育者と呼び、働きかけられる人を被教育者、もしくは学習者と呼び、両者の間に展開する過程を教育としている。

広義では、働きかけをする人（自己）は、対象としての人（個人・集団・社会）に働きかけながら、同時に自己もまた働きかけられている存在であるとし、自己もまた、同時に教育の対象に含めている。さらに、働きかけをする人が、特定の目標や意図をもって働きかけることはもちろん、特定の目標や意図をもたずに、他者とかかわりあうこと自体をも教育の一端に含めている。それは、人間の全生活が教育的基盤であり、人間生活と教育とはそれぞれ固有の内容と特色をもちながらも、不可分に結びついているとする「生活」即「教育」の立場である。人間の発達を人間生活に支えられて促進するとの見方に立つ限り、人間の発達と教育との関係もまた同様である。即ち、人間生活における多様な、多次元的な体験が人間の成長・発達に関与し、その体験にある価値に基づく方向付けをする活動が教育活動であり、その方向付けに積極的役割を担うのが発達促進者（教育者）である。この発達促進者には、専門家としての教育者はもとより、両親、友人、知人などのすべての人的存在および自己自身もまた含まれてこよう。さらに、人間の発達が促進される過程には、書物、自然、慣習、制度等の物的役割が関与することも多く、物的存在もまた発達促進者として含まれてこよう。

筆者らは、以上のような広義の教育、そして、発達との関連性に基づく立場に立っている。

以下に、上述の人間発達にかんする前提を踏えて、関係学的発達観を、さらに明らかにしていこう。

II. 関係学的発達観

1. 関係学的発達研究の動向

関係学的発達研究は、以下の順序と段階を経て進められている。(2)

(1). 1976年代：関係学的発達観樹立の段階。自己・人・物の関係的存在としての人間の発達は、以下の視点から解明されている。

①. 接在発展説：人間の発達は、自己・人・

物の「接在共存」状況（基盤的關係状況）において、自己・人・物が共に活かされあう「接在共存」状況（志向的關係状況）を志向していく過程である。

②. 顕在構造化説：人間の発達は、「接在共存状況」の顕在化の過程である。

關係的存在としての人間の自己における自己領域として、自己的自己 (Ss), 自己的人 (Sp), 自己的物 (So), 人的自己 (Ps), 物的自己 (Os), 人的物 (PO) もしくは物的人 (OP), 統合的自己 (Sspo) を示すことができる。人間の発達は、これらの自己領域が重畳しながら、あるいは単独に（相対的に独立して）顕在構造化し、統合的自己を形成していく過程である。

③ 展開位相説：人間の発達は、「接在共存状況」の展開諸位相の接在活動（媒介作用）による変化過程である。

關係的存在としての人間の活動・生活・生き方を解明し得る原理（關係枠）として、現在までに、22原理が見い出されている。人間の発達は、これらの原理、および原理間の關係の仕方により解明し得るものである。

④. 關係運動説：人間の発達過程は、關係運動の基点（始点）である起動点の成立と移動によって展開する接在共存の形成過程である。

關係状況における運動の方向性を創る基点（始点）としての起動点の基本的類型は、以下のように示されている（1982年までには、これらにさらに、g, h, i, <状況接在化起動点>が見い出されている）。(3)

- a : 人 (or 集団) と 物 (or 課題・仕事) との關係における行為・活動の起動点 (節)
- b : 自己と物との關係における行為・活動の起動点
- c : 自己と人 (個人・集団) との關係における行為・活動の起動点
- d : 自己と物との行為が、人との關係で (人の領域において) 開発される運動の起動点

e : 自己と人との行為・活動が、物との関係で(物の領域において)開発される運動の起動点

f : 人と物との行為・活動が、自己との関係で(自己の領域において)開発される運動の起動点

これらの起動点の成立の仕方から、関係運動の基本的類型として、

<1> : 内在的運動(相対的独自運動)

<2> : 内接的運動(関係開発運動)

<3> : 接在的運動(関係創造運動)

<4> : 外接的運動(関係明確化運動)

<5> : 外在的運動(分化独自運動)

が示されている。人間の発達には、起動点の成立と移動により、接在的運動が展開することで促進される。

- ⑤. かかわり形成説：人間の発達は、関係状況における内在的、内接的、接在的、外接的、外在的かかわり方が分化・構造化され、接在共存状況の発展が連担されていく過程である。

(2). 1977年代：関係運動の方向性と状況関係構造化の関連性が解明されている段階。(2)

根源的な接在共存状況は、関係状況運動の展開過程であり、運動の方向性として、展開する関係状況運動と、①同方向運動、②異方向運動、③交叉運動の方向性を類別することができる。人間発達は、交叉運動の重畳性により促進される。

(3). 1978年代：人間発達の形成位相を、関係状況における自己構造化が関係の発展に及ぼす影響から解明されている段階。(2)

関係状況における自己構造化の12類型は、a. 基本型、b. 連結型、c. 複合型、d. 交叉型、e. 接在型に類別され、さらに、

- ①. 自己領域が基本型→連結型へ改構造化されることは、関係状況の構造拡大化への改構造化、および、
②. 連結型→複合型は、構造分化へ、
③. 複合型→交叉型は、構造交叉化へ、
④. 交叉型→接在型は、構造統合化への改構造化へ連らなることが、起動点の成

立と移動から明らかにされている。

(4). 1979年代：人間発達の形成位相を、関係状況構造化(主として人と物の関係の仕方)が、自己構造化へ及ぼす影響から解明されている段階。(2)

関係状況構造化を、I. 同心的構造化、II. 同接的構造化、III. 交叉的構造化、IV. 併存的構造化、V. 自存的構造化に類型化し、これらの状況への自己のかかわり方が、a. 内在的、b. 内接的、c. 接在的、d. 外接的、e. 外在的であるかによって、自己構造化の過程は、以下のように異なることが示されている。

- ①. 自己領域連鎖構造化：自己における顕在化領域が、(起動)点を媒介にして構造化している特性(関係発達の維持)。
②. 自己領域連結構造化：自己における顕在化領域が、通路を媒介にして構造化している特性(関係発達の持続)。
③. 自己領域重畳構造化：自己における顕在化領域が、領域を媒介にして構造化している特性(関係発達の促進)。
④. 自己領域複合構造化：自己における顕在化領域が、活動を媒介にして構造化している特性(関係発達の発展)。
⑤. 自己領域分離構造化：自己における2領域以上の顕在化領域が、媒介過程なく、それぞれ独立しながら構造化している特性(関係発達の可能性)。
⑥. 自己領域孤立構造化：自己における顕在化領域が、単独で構造化している特性(関係発達の停滞)。
⑦. 自己領域断絶構造化：自己における顕在化領域が、成立していない構造的特性(関係発達の崩壊)。

(5). 1980年代：関係状況における自己の接在構造化をもたらす状況構造化と個のかかわり方が、領域構造化の仕方から解明されている段階。

(6). 1981年代：関係状況における自己の接在構造化をもたらされる過程が、自己領域顕在化の過程と、起動点の成立・移動との関連

性から解明されている段階。(2)

ここでは、まず自己における領域構造化の接合点には、起動点が顕在化し、成立することを明らかにし、次に、自己領域構造化と起動点の成立の仕方との関連性から、人間発達の領域構造化の様相が、以下のように類別されている。

- a. 層的構造化：2構成単位による領域共有的構造化。
- b. 深化構造化：3構成単位による領域共有的構造化。
- c. 拡大構造化：2領域の隣接構造化、もしくは、隔絶構造化。

さらに、自己の接在構造化の志向には、以下のような領域構造化の変化と起動点の成立とが条件になることが解明されている。

- a. 拡大→深化：起動点 d, e, f (機能接在化起動点) への成立。
- b. 層化→深化：起動点 d, e, f (機能接在化起動点) への成立。
- c. 深化→拡大：起動点 a, b, c (構造接在化起動点) への成立。

(7). 1982年代：関係状況における自己と人との接在構造化のもたらされる過程が、自己における人の構造化、および人における自己の構造化の同時的・相即的構造化から解明されている段階。(2)

ここでは、自己(S)と人(P)の接在構造化への過程について、①. 状況構造化、②. SにおけるPの構造化、③. PにおけるSの構造化の3視点を同時的にとり上げ、構造図により、125通りの諸相が明らかにされている。(表2～表6)

さらに、各関係状況におけるSとPとの接在共存の志向は、

- a. Sの内在→内接→接在へ、
- b. Pの内在→内接→接在へ、
- c. SとPとが共に内在→内接→接在へと変化することで具現されることが示されている。

(表1)

2. 関係学的人間発達研究の今後の課題と見通し——1983年代以降へ向けて——

(1). これまでの関係学的人間発達研究の経過から明らかな通り、大まかには、3つの段階を識別することが可能である。

第1段階は、1976年代の関係学的発達観樹立の段階である。人間生活・諸活動の関係学的アプローチは、それまでにも多角的に研究されてきてはいたが、関係学的視点から“人間発達”を課題として焦点化し、研究が開始されたこと、さらに、大局的な観点から、関係学的発達観が整理され、樹立された——という意味で、この年代を1つの発達研究の節目とみなすことができよう。

第2段階は、1977年～1981年代に相当する段階である。この期間は、関係学的発達観の細分化、および応用実践的傾向を強めた研究期間といえる。いわば、自己・人・物の関係状況における自己→人・物への、あるいは、人・物→自己へのなどの関係構成単位を要素として、その分化・構造化・運動の展開等から、人間発達研究が促進されている。

第3段階は、1982年代以降であり、関係構成単位間の相即的關係性、つまり、自己における人の、人における自己の構造化が、同時に問題にされながら発達研究が進められていることである。ただし、本来、人間存在が、自己と人と物との根源的接在共存から成り立っているにもかかわらず、1982年度では、特に、自己と人との関係のみが焦点化されて研究が進められている。従って、当面の課題は、上述の第3段階をより充実させること、即ち、物との関係をとりに入れながら、関係構成単位間の相即的關係性の視点から、人間発達の解明・研究をし続けることである。

(2). 第2の課題は、(1)の課題に即しながら、起動点の成立と移動、自己領域構造化などの視点を加え、人間発達の側面をより明確化していくこと、

(3). 第3の課題は、やや長期的見通しに立つものであるが、関係学的原理に基づく人間発達の促進技法を体系化することである。

表1 接在共存の志向

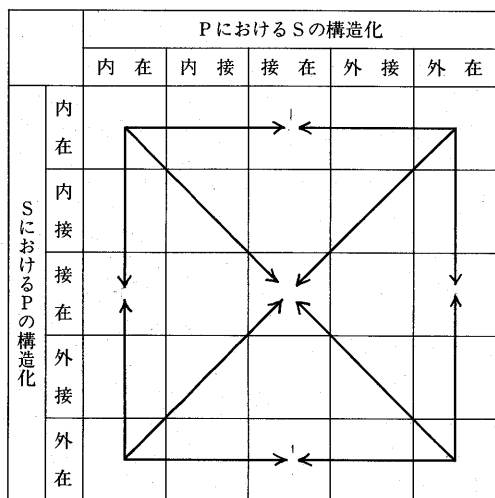


表3 関係状況における自己と人との構造化

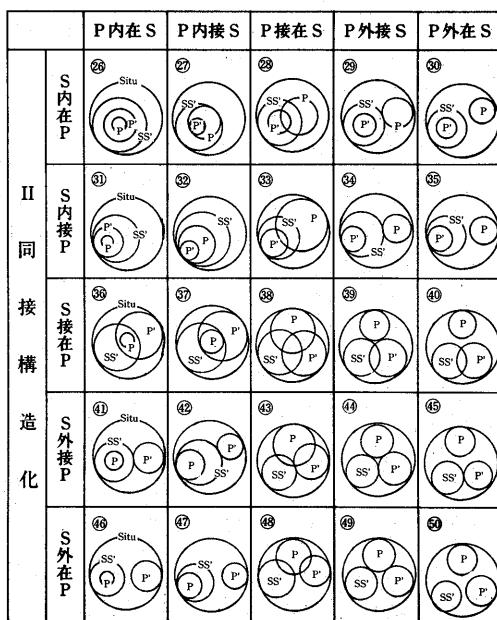


表2 関係状況における自己と人との構造化

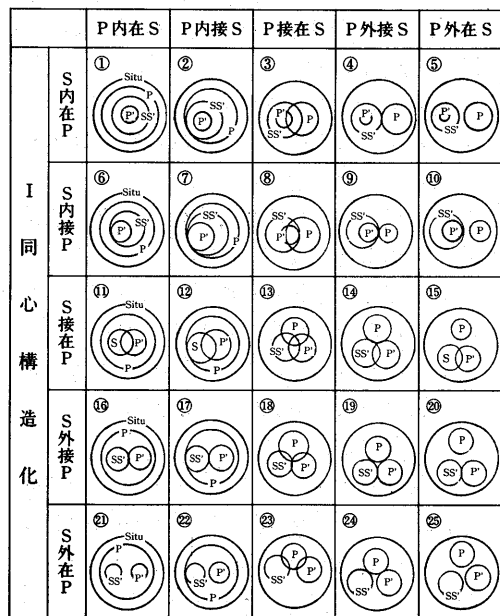


表4 関係状況における自己と人との構造化

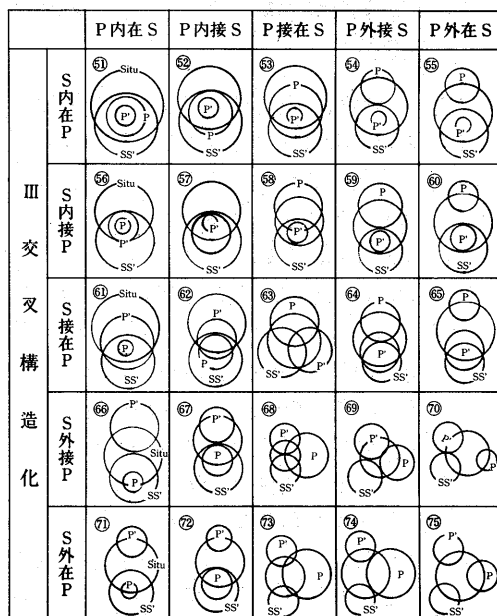


表5 関係状況における自己と人との構造化

		P内在S	P内接S	P接在S	P外接S	P外在S
IV 併 存 構 造 化	S内在P	76	77	78	79	80
	S内接P	81	82	83	84	85
	S接在P	86	87	88	89	90
	S外接P	91	92	93	94	95
	S外在P	96	97	98	99	100

表6 関係状況における自己と人との構造化

		P内在S	P内接S	P接在S	P外接S	P外在S
V 自 存 構 造 化	S内在P	101	102	103	104	105
	S内接P	106	107	108	109	110
	S接在P	111	112	113	114	115
	S外接P	116	117	118	119	120
	S外在P	121	122	123	124	125

III. 関係学的発達観に基づく人間発達の諸様相

上述の発達観，発達研究に基づくならば，人間の実際生活における発達は，どのように解明され，促進され得るのか。次に，乳幼児の生活例をもとに，具体的な考察を進める。

1. 乳幼児期の発達

関係的存在としての乳幼児期の発達は，以下のように，段階づけられている。(19)

- 第1段階：関係受動体験の段階
- 第2段階：関係分化体験の段階
- 第3段階：関係変化体験の段階
- 第4段階：関係力動体験の段階
- 第5段階：関係操作体験の段階

以上の乳幼児期の生活例を，関係学的発達観に基づき，自己構造図と起動点の成立と移動の視点から分析し，考察する。(p'29~p'33)

<分析の視点>

①. 自己構造図

- Ss：自己的自己領域 Sp：自己的人領域
- So：自己的物領域 Os：物的自己領域

Ps：人的自己領域

Po or Op：人的物あるいは物的人領域

SPO：統合領域 (2)

②. 起動点の成立と移動


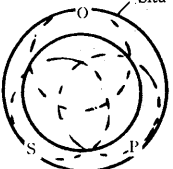
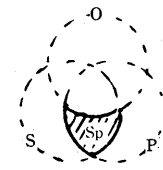
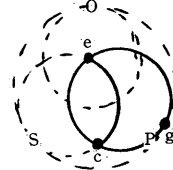
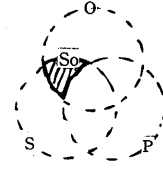
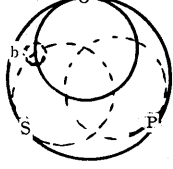
- a：人 (or 集団) と物との関係における行為・活動の起動点 (節)
- b：自己と物との関係における行為・活動の起動点 (節)
- c：自己と人 (個人と集団) との関係における行為・活動の起動点 (節)
- d：自己と物との行為・活動が，人との関係で (人の領域において) 開発される運動の起動点 (節)
- e：自己と人との行為・活動が，物との関係で (物の領域において) 開発される運動の起動点 (節)
- f：人と物との行為・活動が，自己との関係で (自己の領域において) 開発される運動の起動点 (節)
- g：状況接在化人起動点
- h：状況接在化物起動点
- i：状況接在化自己起動点

(1) 第1段階：関係受動体験の段階

(注) 実線は顕在的構造化、点線は潜在的構造化

	年齢	発達的特徴	自己構造図	起動点の成立と移動	促進行動	考察
対自己関係	生後4ヵ月まで	<p>首もすわらず、置かれたままの姿勢を保ちつつける状態であったのが、しだいに首を左右にまわすようになり(2ヵ月くらい)、それにつれて、手や足も動かすようになる。</p> <p>首がしっかりとしはじめると(3ヵ月くらい)、その後に頭を少しもち上げたり、さらには、肩のあたりまでもち上げるようになる。</p> <p>自分から積極的に姿勢を変えようとし、上むきから、横むきくらいまで変化させ、しだいに自分で身体を起こして、起き上がろうと努力する。</p>			<ul style="list-style-type: none"> ・身体的養護(顔や手をふく、オムツをかえる、日光浴、外気浴、入浴など) ・安眠できる姿勢、位置を保つ。 ・ときどき、腹ばいにして、たてて抱いたり、支えをしてすわるなど姿勢の変化体験が育つようにする。 	<p>自己の関係においては、内在的運動が展開しているため、起動点が成立しにくい発達状況である。不快な状況におかれると泣き、起動点<i>i</i>を成立させるが、人が快快的状況を用意すると再び内在的運動を展開する。</p> <p>人関係においては、人があやしたり、話しかけることにより起動点<i>g</i>を成立させ、人外接運動が展開している。この運動がくり返されると、あやすと笑うという起動点<i>c</i>を成立させながら、さらに、人外接運動を展開し、人を認識していく。</p>
対人関係	生後5ヵ月まで	<p>おとなの世話を受けて、身体的に快からの状態であると、すやすやと眠りつづけるがしだいに、おとなが笑いかけると、それに対して笑うようになり(2, 3ヵ月)、おとなの刺激が乳児にとって快快的な状況となると、あやされなくても笑うようになり、声をたてて、笑うようになる。</p>			<p>あやす、声をかけるなどの周囲からの動きかけを豊富にする。</p> <p>とくに、笑いをはじめてからは、動きかけの回数をいっそうふやしていく。</p>	<p>物関係においては、音や光などの外からの刺激に反応し、起動点<i>b</i>を成立させ、みつめる。にぎるなどして、物外接運動が展開し、物を認識していく。</p> <p>この段階では、自己、人、物領域が未分化であり、自己は内在的運動を展開し、人領域や物領域が人との関係でつくられていく、従って、この段階の発達を促進するかかわり方の可能性としては、人が快快的な状況をつくりながら、話しかけをしたり、物との関係を豊かにして起動点の成立を誘うことである。</p>
対物関係	生後4ヵ月まで	<p>音に反応し、光をみつめ、ふれたものをつかんだりする(生後まもなく)、ガラガラを持つと、握ったり、眺めたりして遊ぶ。</p> <p>しだいに、毛布やオムツをけとばすようになり、枕をはずしたりするようになる。</p>			<ul style="list-style-type: none"> ・視覚的、聴覚的、触覚的の刺激が、快快的体験となるようにし、刺激を変化したり、反復したりする。 ・のまわりに動く物を用意する。 ・快的な音色が、乳児の耳にも届くようにする。 ・さわろうとすれば手の届く範囲に物をしめたり、意欲を、誘ったりする。 	

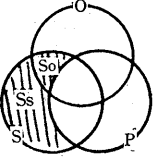
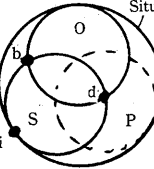
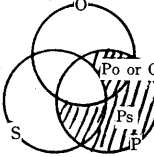
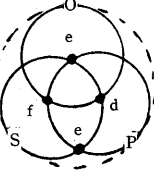
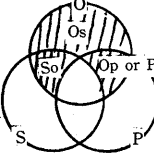
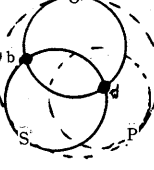
第2段階：関係分化体験の段階

	年齢	発達的特徴	自己構造図	起動点の成立と移動	促進行動	考察
対自己関係	5 〜 8 ヶ月	<p>腹ばいになると、単にその姿勢をもちこたえるだけでなく、手足を動かして運動する。</p> <p>まわりからの支えがあれば、坐姿勢がたもてるようになり(5,6ヶ月)、しだいにひとりですわれるようになる。</p> <p>(6,7ヶ月)。</p> <p>身体が移動するを経験すると、つぎには自分で手足を動かし、移動するようになる。</p>			<ul style="list-style-type: none"> 乳児は、自ら姿勢の変化を促進させることはむずかしいので、周囲が助けて、腹ばいになったり、すわったり、たったりする経験が育つようにする。 姿勢の変化が物との関係を促進するように配慮する。 (見た物を手でつかめるように、身体的位置を移動、変化させるなど)。 	<p>自己関係における自己構造においては、自己的自己(Ss)領域が顕在化し、起動点の成立と移動においては、内在的運動が展開している。また、人の介助による姿勢の変化を体験して、起動点<i>i</i>を成立させながら、自己と状況との同心的構造化を促している。</p> <p>人関係においては、特定の人(Sp)と他の人(Ps)の区別ができるようになり、起動点<i>c</i>,<i>e</i>の自て内接、人内接運動が展開している。発達を促進するかかわり方の可能性としては、他の人との関係体験が促進される起動点<i>g</i>を成立させ、人外接運動を展開させて、人の領域における人的自己(Ps)領域を同時に分化構造化していくことである。</p>
対人関係	5 〜 6 ヶ月	<p>おとなとの接触経験をつむと、しだいにふだん、自分の世話をしてくれる特定のおとなに対して、差別的に反応するようになる(母親と他の人との区別ができてくる)。</p> <p>よその人の顔をじっと見て、ベソをかいたり、表情を変えたりするようになる。</p> <p>(5,6ヶ月)。</p>			<ul style="list-style-type: none"> 特定の人(たとえば、母親)との心理的安定体験が育つように、話しかけ、笑いかけ、共通体験が育つようにする(いっしょに音を聞いたり、物を見たりするなど)。 しだいに他の人との体験、それも短時間から長時間へと移行するように、その機会をふやしていく。 	<p>物関係においては、見た物には手をふれようとする内的動きがあり、自己的物(So)領域が顕在化し、潜在的起動点<i>b</i>が成立している。発達を促進するかかわり方の可能性としては、手のふれる範囲に物を置くなどの潜在的起動点を機能的起動点に変化させるような状況を用意することが、考察される。</p> <p>この段階は、未分化な領域から、状況における人の領域、物の領域を分化してとらえられるようになり、自己における内在的運動から内接的運動への変化がみられる。</p>
対物関係	生後 5 ヶ月	<p>見たものに手をふれようとする。</p> <p>最初、ものを見ると、手を動かして興奮し、それをうまくつかめると喜び、なんでもその行為をくり返す。</p>			<ul style="list-style-type: none"> 目と手の協応動作が成立しやすいうちに、手のふれる範囲にオモチャを置いておく。 手の触れたときに、触れた感覚や握った感じが、快的な体験となるように、肌ざわりのよいもの、手に握れる大きさのものなどを、用意しておく。 	

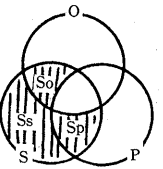
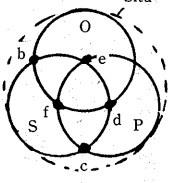
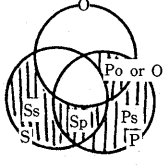
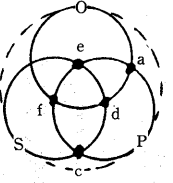
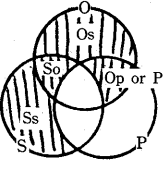
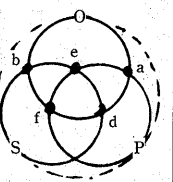
第3段階：関係変化体験の段階

年齢	発達的特徴	自己構造図	起動点の成立と移動	促進行動	考察
対自己関係 9 10 ヶ月	積極的に身体を移動させようとする傾向が強まり、はいはいをしたり、身体の方を変えようとする。 食事・睡眠など、生活習慣が少しずつ整ってくる。			<ul style="list-style-type: none"> 腹ばいの姿勢でうしろへ進んだり、坐姿勢で身体のむきを変えたり、うしろへ進んだりする体験を育てる。 しだいに、はいはいの体験が育つようにする。 離乳食を喜んで食べたり、午睡の時間がきまってきたり、便器への適応がはじまるなど、基本的な生活習慣の芽ばえがつかかわれるようにする。 	自己関係においては、自己的自己(Ss)の領域が顕在化し、自己の行動が即状況となり、起動点 <i>i</i> を成立させながら、自己をとりまく状況において展開している活動に即そうとする動きのみられることから、内接的と同方向運動が展開している。 人関係においては、自己的人(Sp)、人的自己(Ps)領域が顕在化し、人を認めはじめると積極的動きかけをし(起動点 <i>c</i> , <i>e</i> を成立させ)自己と人との同方向運動が展開している。 物関係においては、物的自己(Os)、自己的物(So)領域が顕在化し、起動点 <i>b</i> を成立させながら、自己-物外接運動が展開している。
対人関係 7 9 ヶ月	周囲の人が自分の欲求を満たしてくれるということがわかりはじめると、周囲にたいして積極的に動きかけ、同じことをなんでもくり返してもらおうとする。 しだいに、周囲の人そのものが欲求の対象となり、おとながそばにいることを喜びとするようになる。			<ul style="list-style-type: none"> 子どもからの動きかけは、なるべくうけ入れるようにする。 子どもの相手となる時間や機会をふやすようにする。 	発達を促進するかかわり方の可能性としては、Os, Soがさらに顕在化しやすいように、いろいろの物との関係、人との関係を内接的、外接的留意することが大切であると考察される。 この段階では、状況における人や物への積極的動きかけがみられ、この段階の発達を促進するかかわり方の可能性としては、人が動きかけに対して反応したり、答えたりすることや、身近な所に物を置いたりするなど、多元的な留意が必要であることが考察される。
対物関係 6 10 ヶ月	そばにあるものや、目にふれるものを、自分の意志で動かしてみようとし、なんでもさわろうとする。 最初、口へもっていき、しだいにそれをいじったり、気に入ったもので遊ぶようになり、さまざまな視覚、聴覚、触覚の変化体験をつんでいく。			<ul style="list-style-type: none"> 触れるもののかたよりをなくすようにつとめる。 (たとえば、オモチャだけでなく、あふなくないもので日常生活用品など) 	

第4段階：関係力動体験の段階

	年齢	発達的特徴	自己構造図	起動点の成立と移動	促進行動	考察
対自己関係	11 ～ 18 ヵ月	<ul style="list-style-type: none"> ・つかまりだちをしてから、ひとりで歩くようになり、走る、歩くことが自由になる。 ・食器を自分でさわったり、持ったりして、自分で食べたがる（食事関係における自己操作体験）。 			<ul style="list-style-type: none"> ・自分で食べたがったり、食器を自分でさわって、食べたがったりする場合は、できるだけその意欲を妨げないようにして、自分で歩くようにしたり、少々こぼしても、自分で食べるようにしむける。 ・他の人や物とは関係で身体運動や言語活動が促進するような機会を豊富に用意する（リズムに合わせて身体を動かす、要求を回りへ知らせるなど）。 	<p>自己関係においては、自己的自己(Ss)、自己的物(So)領域が顕在化し、自己と物との領域における起動点 b, i, d が成立し、交叉運動が展開している。</p> <p>人間関係においては、自己的人(Sp)、人的自己(Ps)、人的物、物的人(Po or Op)領域が顕在化し、自己と人との領域における起動点 e, c を成立させながら、さらに、ことばや遊びを媒介に起動点 d, f を成立させて、自己と人との交叉運動が展開している。</p> <p>物関係においては、自己的物(So)、物的自己(Os)、人的物、物的人(Po or Op)領域が顕在化し、自己と物との領域における起動点 b, d を成立させて交叉運動が展開している。</p> <p>この段階は、相互作用の展開や、交叉運動の展開がみられ、発達を促進するかわり方の可能性としては、積極的な働きかけに対して、いろいろなパターンへの受けとめ方が必要であると考察される。</p>
対人関係	10 ～ 21 ヵ月	<ul style="list-style-type: none"> ・おとなとの相互交渉があらわれる。 ・周囲の人の意志にそくした行動をあらわすようになる（ボールを投げかえす、「ちょうだい」「ダメ」に反応するなど）。 ・子どものなかにまじっていると、ひとりで、気げんよく遊ぶ（15ヵ月くらい）。 			<ul style="list-style-type: none"> ・いっしょに歌を歌ったり、話しかけを楽しむ機会をふやす。 ・他の人との相互交渉がくり返される体験が育つようにする（困ったとき、助けを求めて、そのそとが達成される経験をしたり、リズムカルなくり返しのある話を聞いて、自分も片こで話したり、いわれた簡単なことを行ったりする体験が育つようにするなど）。 ・子どもに接触する機会を用意する。 	<p>この段階は、相互作用の展開や、交叉運動の展開がみられ、発達を促進するかわり方の可能性としては、積極的な働きかけに対して、いろいろなパターンへの受けとめ方が必要であると考察される。</p>
対物関係	11 ～ 19 ヵ月	<ul style="list-style-type: none"> ・いろいろな材料を、いろいろな方法で試していくうちに、その材料の性質を知り、事物の性質に応じて、その物を操作するようになる（箱のフタの開閉、鉛筆やクレヨンを使ってかく、マリを投げたり、受けとったりするなど）。 			<ul style="list-style-type: none"> ・いろいろな形に変形できる材料（水、砂、積み木など）にふれる機会を用意する。 ・身のまわりの用具、遊具、持ちものなどの区別がわかって、名前をいってみたり、その物をさし、楽しんだりする体験が育つようにする。 	<p>この段階は、相互作用の展開や、交叉運動の展開がみられ、発達を促進するかわり方の可能性としては、積極的な働きかけに対して、いろいろなパターンへの受けとめ方が必要であると考察される。</p>

第5段階：関係操作体験の段階

年齢	発達的特徴	自己構造図	起動点の成立と移動	促進行動	考察
対自己関係 19ヶ月以後	<ul style="list-style-type: none"> 物理的な障害物を克服して、自己操作が可能になる段階（階段の昇降やとびこえることなど）。 簡単な表現活動ができるようになる（作ったり、かいたり、歌ったりなどのくり返し）。 言語の模倣がさかんになり、日常生活で見たり聞いたりしたことを遊びのなかにあらわすようになる。 基本的な生活習慣への積極的参加が行なわれる。 			<ul style="list-style-type: none"> 食事、排泄、午睡、簡単な衣服の着脱、顔ふき、手洗い、鼻ふきなどが自分なりにひとりですることができるようにする。 反復行為（階段のとびおりなど）を促進する。 2歳前後に運動用具への接触する機会を用意する。 してもらいたいことを、ことばを使って表現する。 日常の簡単なあいさつ。 	<p>自己関係においては、自己的自己(Ss)、自己の人(Sp)、自己的物(So)領域が顕在化し、起動点においては、自己領域における起動点b, c, d, e, fの成立がみられ、人の介助なしに、自己自身で接在共存状況を志向することが可能となる。</p> <p>人関係においては、自己的自己(Ss)、自己の人(Sp)、人的自己(Ps)、人的物あるいは物的人(Po or Op)領域が顕在化し、起動点においては、人領域にある起動点a, e, d, f, cがみられ、人の存在を受け入れながらのかかわり方が育ってくる。</p>
対人関係 22ヶ月以後	<ul style="list-style-type: none"> 人との関係で、自分をおさえることができるようになる。 日常生活に必要なことばがわかり、ことばの数が増え、ことばを使って、おとなとの交流ができる。 おとなや物が媒介となって、友だち関係が展開しはじめる。 			<ul style="list-style-type: none"> 待つこと（少しの間）。 興味のあることを周囲の人にたずねる。 他の子どもとの遊び（追いかけてこ、共同の物を使って遊ぶなど）。 	<p>物関係においては、自己的自己(Ss)、自己の物(So)、物的自己(Os)、物的人あるいは人的物(Op or Po)領域が顕在化し、起動点においては、物領域にある起動点a, b, d, e, fの成立がみられ、物を操作、工夫して遊ぶかかわり方が育っている。人の介助なしに、物を生かし、自分なりに楽しむことができる。</p> <p>この段階は、変化を楽しんだり、新しいものをつくりだせ、自らかかわって新しさを体験することができる。従って発達を促進するかかわり方の可能性としては、いろいろなかかわり方が体験できるように、また、かかわり方の違いにより、結果も異なる体験ができるように身近な人の介助が大切である。</p>
対物関係 20ヶ月以後	<ul style="list-style-type: none"> 自分でくふうして、物を組み合わせたり、形をつくらうとしたりする（積み木を並べたり、積み重ねたり、いろいろに組み合わせる形らしいものをつくったりする。クレヨンや鉛筆を使って、線をかいたり、線の交錯をつくるなど）。 道具の使用法が向上するにつれて、より、複雑な物がつくられるようになる。 			<ul style="list-style-type: none"> 運動遊具の機能に応じて、さまざまな遊びかたを経験できるようにする。 器具や遊具の性質に応じて、それなどを使いながら遊べる活動を促進する（粘土をちぎったり、こねたり、たたいたり、のぼしたりする。積み木や、組み木を構成するなど）。 	<p>物関係においては、自己的自己(Ss)、自己の物(So)、物的自己(Os)、物的人あるいは人的物(Op or Po)領域が顕在化し、起動点においては、物領域にある起動点a, b, d, e, fの成立がみられ、物を操作、工夫して遊ぶかかわり方が育っている。人の介助なしに、物を生かし、自分なりに楽しむことができる。</p> <p>この段階は、変化を楽しんだり、新しいものをつくりだせ、自らかかわって新しさを体験することができる。従って発達を促進するかかわり方の可能性としては、いろいろなかかわり方が体験できるように、また、かかわり方の違いにより、結果も異なる体験ができるように身近な人の介助が大切である。</p>

おわりに

筆者らが、これまでに、研究的立場、実践研究の進め方について多くを学ぶことのできた松村康平先生に、深く感謝いたします。

引用・参考文献

1. 佐藤啓子 「人間発達の基礎」 第4回 関係学会大会シンポジウム資料（『関係学年報』第4巻第1号掲載予定） 1983
2. 松村康平・佐藤啓子・小原伸子 「人間発達についての関係学的考察（I）～（XIV）」 日本保育学会大会発表論文集 1976～'82
3. 松村康平・佐藤啓子・小原伸子 「かわり方の発展にかんする研究（1）～（12）」 日本応用心理学会大会発表論文集 '75～'82
4. 佐藤啓子・小原伸子 「人間科学における関係弁証法の展開（1）～（3）」 『人間科学研究』 文教大学人間科学部紀要 1979～'81
5. 松村康平 「保育実践の現況と「発達」に関する考察」 山下俊郎古稀記念論文集 編纂会 玉川大学出版部 1973
6. 松村康平 「集団の発達を促すかわり方について」 『特別活動5』 Vol.8 日本文化科学社 1975
7. 松村康平 「人間発達に関する関係学的考察」 『人間文化研究年報』第1号 お茶の水女子大学人間文化研究科 1977
8. 松村康平・佐藤啓子 「関係の発展にかんする研究——関係原理の展開について——」 『関係学年報第4巻第1号』 関係学研究編集委員会 1976
9. 佐藤啓子 「発達についての見方」 『関係学研究第1巻第1号』 関係学研究編集委員会 1973
10. 佐藤啓子 「子どもの発達」 『保育と集団指導』 ソシオサイコブックス 1974
11. 吉川晴美 「個と集団の発達に関する一研究 — 構造から構造への転換」 『関係学研究第5巻第1号』 1977
12. 浅野恵美子 「発達観をめぐっての関係弁証法と唯物弁証法」 『関係学研究第5巻第1号』 1977
13. 佐藤啓子 「生活と遊び」 『保育学概論』 同文書院 1971
14. その他